群衆の建築

オープンスペースを複合する人々の活動のための都市建築

Architecture for Mass

Complex of Open Space and Architecture for Urban Activities

奥山研究室　12M17299　村部 塁 (MURABE,Rui)

1. 序　都市において、道路や駅前広場は一時的に祝祭的な活動の場となることがある (図 1)。近年、そういった交通のための空間を積極的に人々の活動に利用される公共空間として整備しようとする動きがみられる [1)]。一方で、建築は路地空間の引き込みや公開空地などによって、敷地外の都市のオープンスペース [2)] (以下、OS) と多様な関係をつくってきたが、建築と OS の管理主体が異なり、その関係は制限されてきた。今後、建築と OS の関係をつくる管理主体同士の連携によって建築と OS の複合はより多様な活動を許容し、人々が集う都市における重要な公共空間となると考えられる。そこで、本研究では都市における建築と OS との接続関係を事例から整理し (図 2)、今後再整備が計画されている新宿駅東口を対象に、人々の多様な活動を許容する駅前広場の枠組みと共に、OS を複合する人々の活動のための都市建築を提示する。

2. 建築とオープンスペースの接続関係

2-1. 建築のオープンスペースに対する接続表現

都市の OS との関係から建築を構想する知見を得るために、都市の OS に面する建築 [3)] を資料に OS との接続関係を検討した。対象となる OS として歩行者天国、交差点、広場、公園を設定した (図 3)。次に、各資料にみられる OS に対する主要な建築的操作を接続表現として整理すると、OS と連続する空間を建築内外に構える【空間】、建築のファサード部に特徴的なスキン、情報のスクリーン、半外部などの活動空間を表出する【表層】、OS に対して自律、または連続した形態をつくる【形態】から整理できた (図 4)。

2-2. 建築とオープンスペースの接続関係　前節で整理した接続表現と OS の種類との関係を資料ごとにまとめ、図 5 に示した。各接続表現ごとにみると【空間】では広場に対して半外部を表出することで OS と連続的な場をつくりだそうとするものが、【表層】ではどの OS に対しても情報媒体や活動空間が現れることで性格づけるものが、【形態】では交差点や広場に対して自律的な造形によって OS を象徴化するものがそれぞれみられた。ここで、OS の環境を広範に規定する形態をもち、活動空間を表出させるアクロス福岡のように、接続表現を複数もち多面的に OS との接続を試みる事例もみられたが、明確な境界の分節により建築と OS の空間的な接続は限定されており、建築と OS が一体化されている事例はみられなかった。

3. 群衆の建築

3-1. 建築とオープンスペースの複合　前章でみた事例とは異なり、建築と OS に二分されない不明瞭な領域が都市には存在する。例えば、本計画敷地であ

図 1. 活動に利用される OS

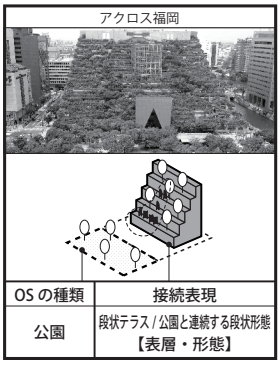


図 2. OS に面する建築

図 3. 接続する OS の種類

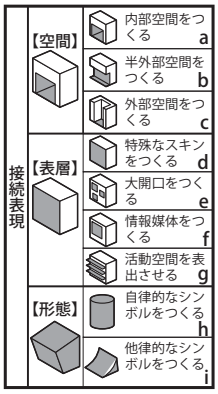


図 4. 接続表現

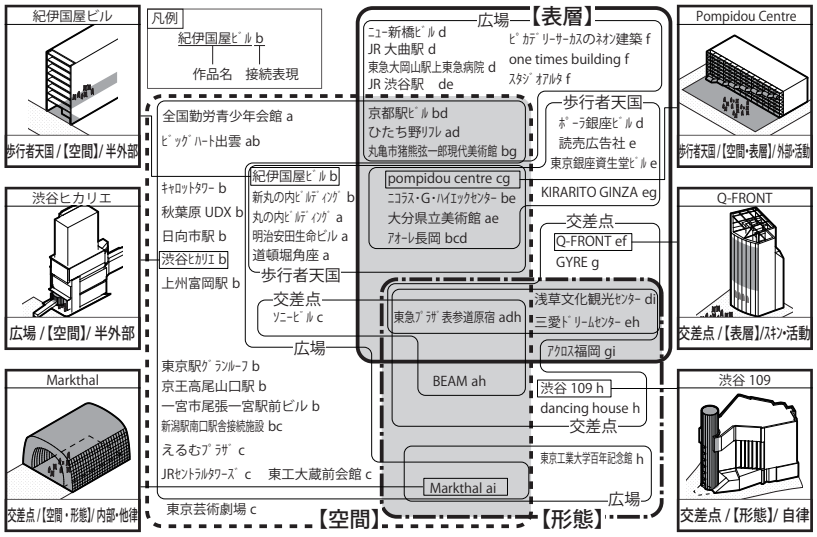


図 5. 建築とOSの接続関係

る新宿駅東口周辺では、JR 所有の土地に対して都市計画法の規定により公衆道路としての利用が求められ、OS として利用されている。このような管理主体が不明瞭な場所では、建築と OS 双方の主体が連携することで建築と OS はより高度に関係しうると考えられる。そこで、建築と OS とを横断しながら機能や空間の連鎖によって接続関係をつくる**パブリックガジェット** (以下、ガジェット) を提示する (図 6)。

3-2. 計画　新宿駅では、南口周辺の開発に続き、東西自由通路 (2020 竣工予定) によって人の流れの変化が予想され、東口周辺を歩行者に開かれた街として、歩行者天国や駅前広場を中心に整備することが計画されている [4)]。しかし、現状の新宿駅前に面する建築は、経済原理が先行し公共空間の割合は乏しい。そこで、企業、民間、行政などの多主体の連携によって多様な活動を許容する空間として OS を活用し、駅前広場に面する建築の公共空間を増大させる都市建築の枠組みとともに、OS を複合する建築を提案する (図 7,8)。本提案では、既存の交通のための駅前広場をタクシープールの遠隔化、搬入の時間指定制などによって、駐車場入口周辺を残して、2 つの歩行者広場 (OS1,OS2) を計画している。歌舞伎町方面など 3 方面から地下通路への主要なアクセスをつくり、それぞれにガジェットを配している。ガジェットは多様な素材で人のふるまいを誘発するスキンと建築の機能ヴォリュームや地下階段などの都市機能ヴォリュームによって、建築 -OS 間の立体的な視線的・動線的接続をつくっている。建築内部では商業空間に専門学校と連携したスタジオや企業のワークショップ、公共施設などの公共空間が貫入し、ガジェットと接続させることで機能の連関を促した。具体的には、北側の抜けがある OS1 に配された**ガジェット A** はメトロプロムナード・新宿大通りと地下地上をつなぐ櫓のような肥大化した外部階段を中心に、企業プロモーションや屋外展示など発信性の強い活動が、立体的に連鎖されていくものである。最も人のフローが多い OS1 に建築内部への主動線があり、多様な公共空間を抜けながら屋上まで続いていく。次に、OS2 に接続する**ガジェット B** では、分散した小規模なヴォリュームにより滞留空間をつくり、バザール空間や立体的な公園空間が接続している。囲い込まれた空間は表現活動の舞台として利用される。**ガジェット C** は図書館、ホールなどの公共機能のヴォリュームが OS に表出し、回り階段によって図書空間と本の市など建築の機能と OS における活動を接続させていく。これらガジェットをもつ建築は OS と複合することで、人々の多様な活動を許容する建築となる (図 9,10,11)。

4. 結　本研究では、建築とオープンスペースとの接続関係を事例から整理し、その接続と複合のあり方を見出した上で、新宿駅東口を対象にオープンスペースを複合する人々の多様な活動を許容する都市建築を駅前広場の枠組みと共に提案した。これは、既存の都市のオープンスペースの価値を再定義し、建築空間から都市空間までを包含する枠組みの下で更新していく都市建築のあり方を示すものと考える。

注
1) 官民連携関連施策による都市整備、研究 (新道路利活用研究会) など、近年における一連の活動のことを指す。
2) ここでいうオープンスペースとは、歩行者天国化された道路、交差点、などの多くの人が集う都市の建築群に囲われた空地を指す。
3) 主要都市のオープンスペースと敷地が接する商業・公共建築を対象資料とする。
4)「新宿駅東口まちづくり構想」(2011 年)

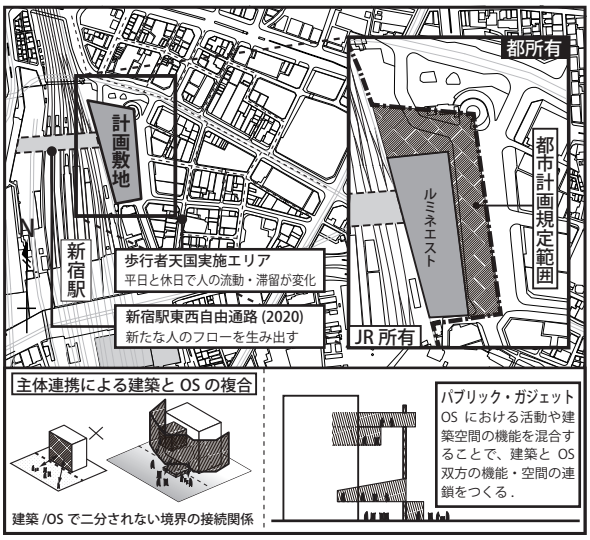


図 6. 敷地概要 / 主体連携による建築と OS の複合

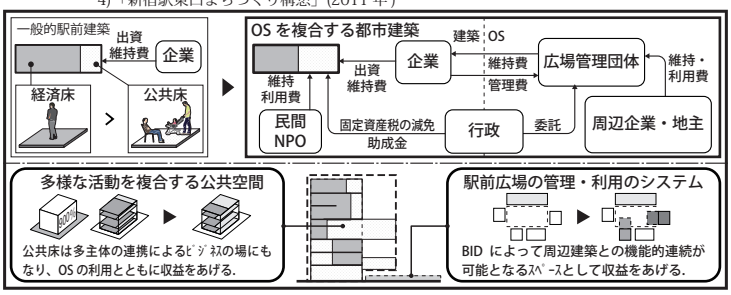


図 7. 駅前広場における OS を複合する都市建築の枠組み

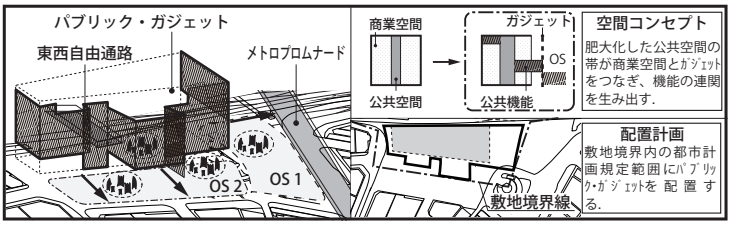
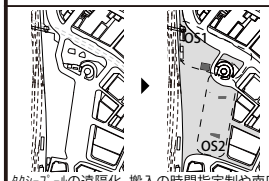


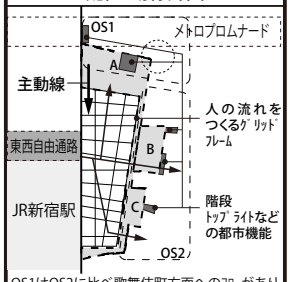
図 8. コンセプト・ダイアグラム

オープンスペース



ﾀｸｼｰﾌﾟｰﾙの遠隔化、搬入の時間指定制や南口へのﾊﾞｽﾀｰﾐﾅﾙ移転を想定し、既存駅前広場を歩行者広場化する。地下駐車場部を境にOS1とOS2、2種のOSをつくる。

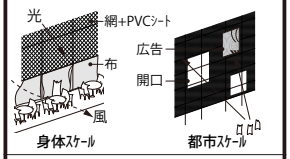
配置/動線計画



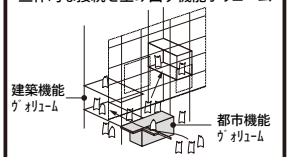
OS1はOS2に比べ歌舞伎町方面へのﾌﾛｰがあり、流動性が高い。大通りや線路の抜けが交差するため、大ｽｹｰﾙのｶﾞｼﾞｪｯﾄAを配す。OS2では大小ｽｹｰﾙのｶﾞｼﾞｪｯﾄB・Cで多様な場をつくる。都市機能のｳﾞｫﾘｭｰﾑと合わせて計画する。

パブリック・ガジェット

多様なスケールのふるまいをうむスキン



立体的な接続を生み出す機能ボリューム



ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸ・ｶﾞｼﾞｪｯﾄによって、建築-OS間で多様な場がつくられる。それらの視線的・動線的接続が立体的に展開することで建築とOSは高度に複合される。

機能連関

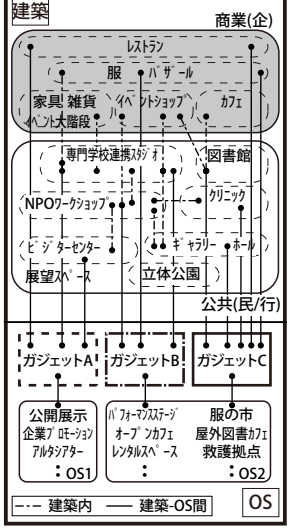
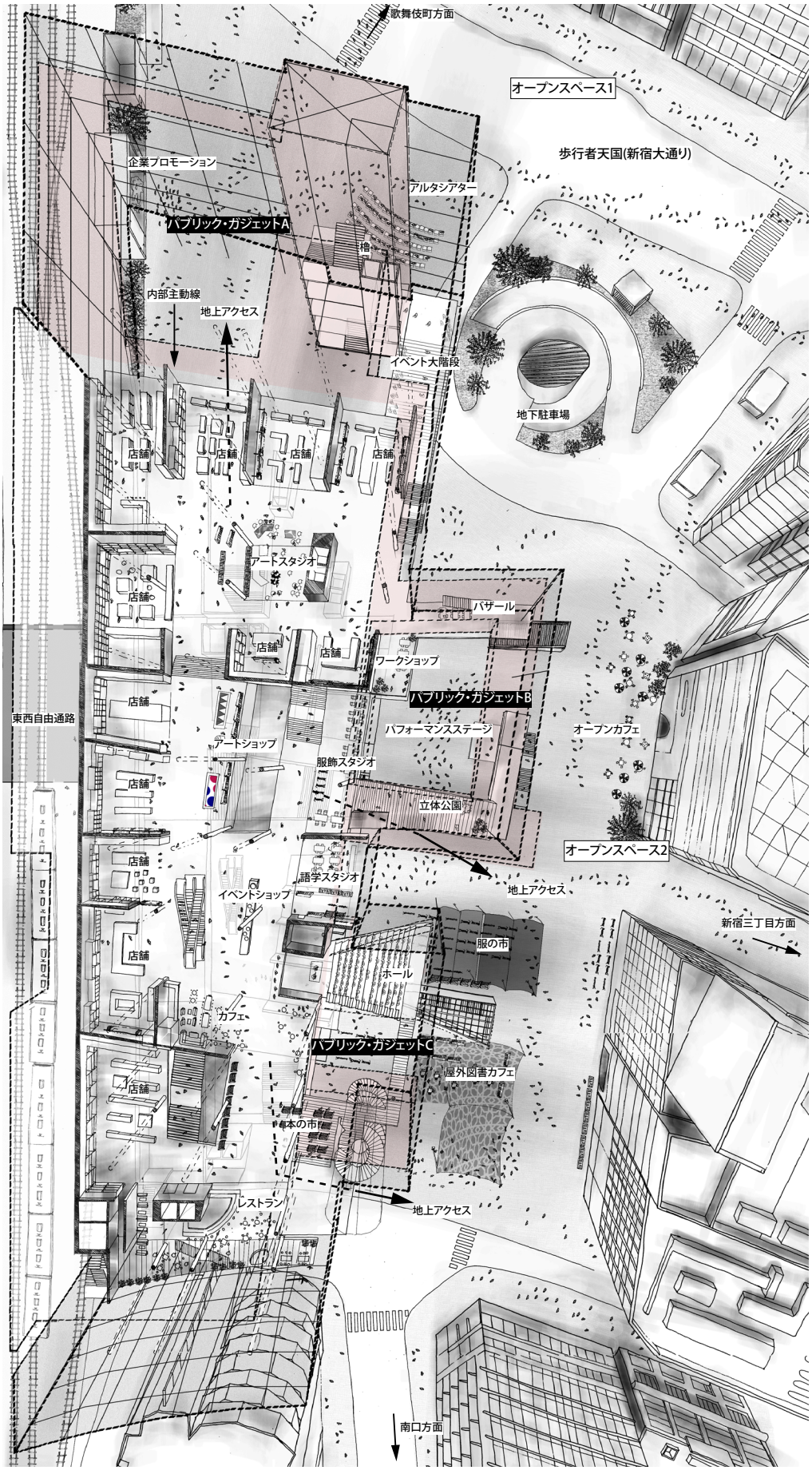


図9.平面パース GL+24000



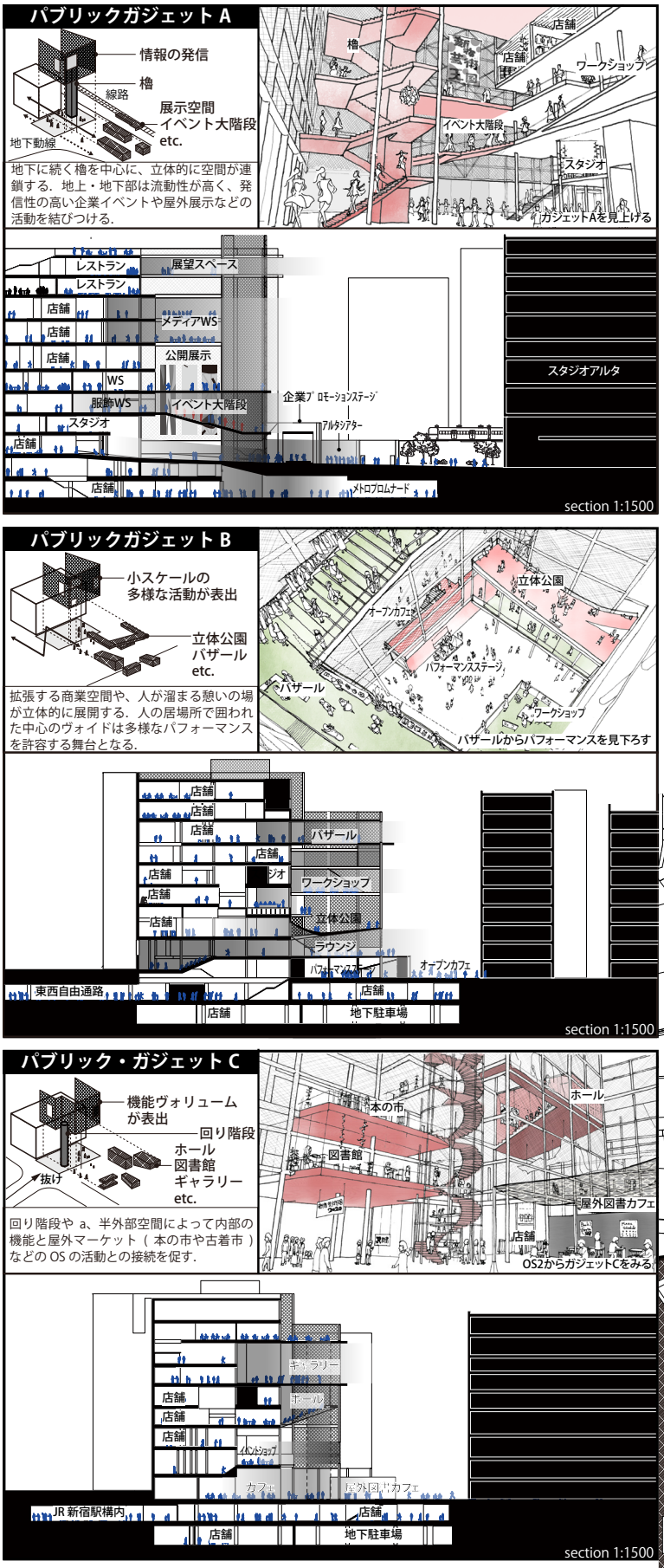


図10.パブリック・ガジェットのスキーム

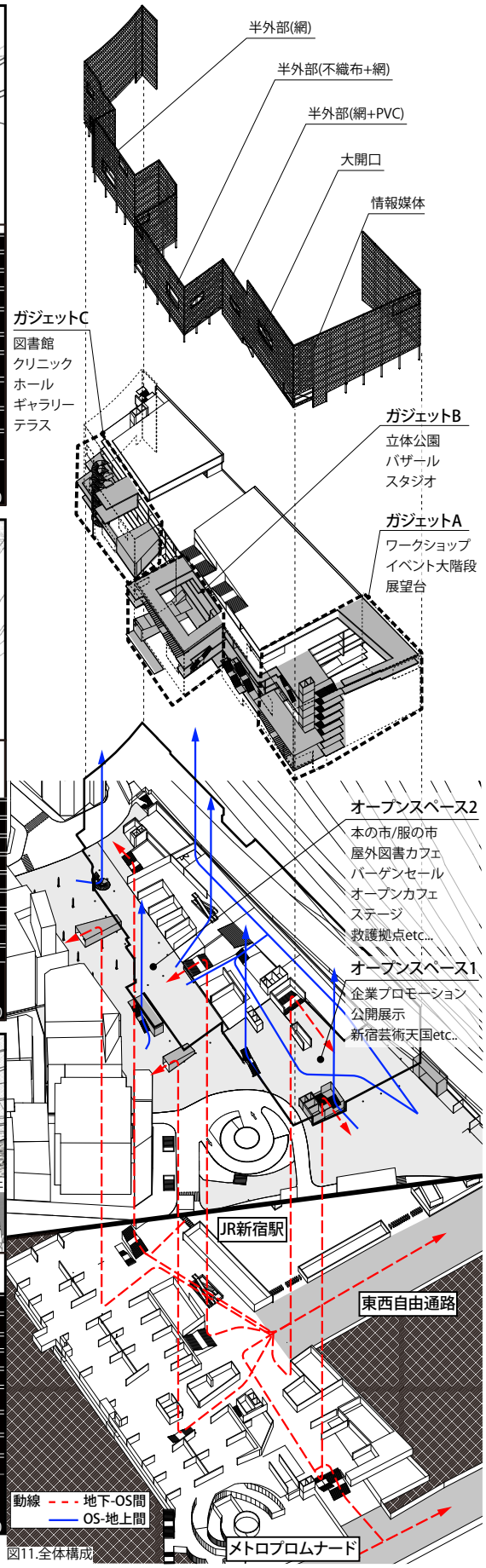


図11.全体構成